

政治経済学 I

第 1 回：政治経済学とは何か

矢内 勇生

法学部/法学研究科

2015 年 10 月 7 日



神戸大学

今日の内容



- 1 ガイダンス
 - 授業の概要
 - 受講上の注意
- 2 政治経済学とは何か
 - 政治と経済
 - 古典的政治経済学
 - 新しい政治経済学
 - 例を使って考える

授業の目的



- 政治経済学の基本的な理論・モデルを理解する
- 政治経済学における主なパズルと現時点での答えを理解する
- 政治・経済現象を政治経済学的に読み解く力をつける

授業の内容



- 政治経済学とは何か
- 投票と選挙のモデル
 - 中位投票者モデル、業績評価投票、選挙アカウントビリティ
- マクロ経済と政治
 - 景気循環、財政赤字、租税と再分配政策
- 独裁制と民主制
 - 経済と民主制への移行
 - 民主制の経済的帰結

詳しくは[シラバス](#)を参照

教科書・参考書



- 教科書：なし
- 参考書：シラバス参照
- シラバスの必読文献は必ず読むこと（詳細は後述）：大学附属図書館またはインターネットで入手可能

シラバスと予習



- シラバスは PDF ファイルでウェブサイトにアップロード
- 矢内のウェブサイト：<http://www.yukiyanai.com> → 授業 → 政治経済学 I
- シラバスで「必読」とされている文献を予習する
- シラバスからリンクされている論文は学内ネットワーク接続でダウンロード可能

成績評価の方法



- 授業への参加：20% **出席ではない**
- 期末試験：80%
- ただし、受講生の人数によっては変更することがある

オフィスアワー



- 場所：第四学舎 404 研究室
- 日時：月曜と水曜 12-13 時
- その他の日時を希望する場合はメールで予約
- メールでの質問も歓迎（シラバス参照）
- 授業中の質問は特に歓迎

今日のメインテーマ



政治経済学とは何か？

政治と経済の関係



- ① 無関係：政治と経済は別の次元で作動する
- ② 経済が政治を決める
- ③ 政治が経済を決める
- ④ 政治と経済の間には相互作用がある

政治経済学とは何か？

ひとつの解答：政治と経済の関係について研究する学問である！

包括的で正しい答えだが、疑問が解消されたとは言えない

政治学？ 経済学？ それとも…



もう少し考えてみると…

- 政治学の下位分野？
- 経済学の下位分野？
- 政治学と経済学が協力する学際的領域？
- 政治と経済の関係について研究をする独立した新しい学問？

古典的政治経済学



- 18世紀から19世紀の社会科学一般の呼称：Political Economy
- 政治と経済を切り離して考えない：政治学と経済学の区別もない
- 代表的な研究
 - Adam Smith 『道徳感情論』 『諸国民の富（国富論）』
 - David Ricardo 『経済学および課税の原理』
 - John Stuart Mill 『経済学原理』 『自由論』 『功利主義論』 『代議制統治論』

D. Ricardo の『経済学および課税の原理』は英語では *Principles of **Political Economy** and Taxation*

J.S. Mill の『経済学原理』は *Principles of **Political Economy***

古典的政治経済学から経済学へ



20世紀前半（1930年代頃）：経済学 (Economics) が古典的政治経済学から独立

- 経済学を「価値の問題」から切り離す
- 経済学は事実を扱う
- 政治的・制度的な要素を捨象する

● （政治的でない）制約の下で行動する消費者と企業に注目
研究方法の進歩と洗練化 (i.e. 学問の発展) のために、対象を限定した

詳しくは「経済学史」で

(古典派) 経済学



- 他の用途をもつ希少な経済資源と目的を結びつける人間行動を研究する学問 (Lionel C. Robbins の定義. 1932. 『経済学の本質と意義』)
- 希少資源の水平的 (効率的) 配分に関する研究
- 方法論的個人主義
- 合理的経済人の仮定
- 数学の多用
- 演繹主義
- 結果の最適性が最大の関心

(伝統的) 政治学



- 誰が、何を、いつ、どのように手に入れるか (Harold Lasswell)
- 「希少資源の権威的配分」に関する研究 (David Easton)
- 様々な分析レベル：個人, 社会, 国家, etc.
- 不合理なアクター（有権者, 政治家, etc.）
- 「物語」「寓話」の多用
- 帰納主義
- 権力や権威、影響力をどう行使するかを重視

政治学 vs. 経済学：1つの学問から相容れない学問へ



- 研究対象も研究方法も異なるものに
- 互いに専門化が進んだ
 - 経済学が科学化し、分野 (discipline) を確立
 - 政治学は …
- 政治経済学はいったん姿を消した（主流ではなくなった）

ただし、マルクス主義（経済が政治を規定する）やケインズ主義（政治が経済を規定する）として生き残った

新しい政治経済学の必要性



20世紀後半：政治学と経済学が再び交わる

- 経済現象の政治的要因を調べたい（経済学者の関心）
 - James Buchanan や Gordon Tullock らの「公共選択論」
- 政治現象の経済的要因を調べたい（政治学者の関心）
 - Morris Fiorina の「業績投票」の研究

政治的要因が経済現象に与える影響の研究例



Q: 理想的な財政支出額は？

A: 最適支出：経済学的な解

現実: 支出額が最適解ではない

なぜ？ 経済学だけでは解決できない

政治の考慮 利害の対立が最適解の実現を阻む

経済的要因が政治現象に与える影響の研究



Q: 有権者はどうやって投票先を決めるの？

A: 社会的属性 (e.g. 職業) によって決める

現実: 同じ人が選挙ごとに投票先を変える

??? 社会的属性 (定数) では投票先 (変数) を説明
できない

経済学の方法 合理的投票者が自らの効用を最大化するよう
に投票する：合理的選択論

政治経済学の核



- 少なくとも2つある「政治経済学」
- この授業では両方とも扱う：両方の関心に応えるため、広く・浅く
- 異なる「政治経済学」が共有するもの
 - 利害の対立
 - 制度

政治経済学とは



- 経済学の観察：現実に実施される政策は「最適」な政策ではない
- 政治学の観察：政治アクターの行動は必ずしも合理的に見えない
 - 経済学の**暗黙**の前提：最適な政策（行動）が実施（選択）される
 - 理論と現実の差異：政治的制約（i.e. 利害の対立）がある

政治経済学の関心

政治的制約によって、経済学的に最適ではない政策（行動）とその政策（行動）が生み出す帰結をどう説明するか

基本的な前提：政治的制約がなければ、最適解が達成される

例題 1



例題 1：一個人の意思決定

Aさんが1000円を持っている。Aさんは、その1000円で紅茶とワインを買いたい。紅茶は1gあたり p_1 円でワインは1mlあたり p_2 円である。Aさんは紅茶とワインにいくら使うか決めなければならない。

Aさんの効用を最大化すればよい！

- 利害の対立がない
- よって、純粋に経済学的な解答が可能



例題 1 に対する経済学の答え

与えられた予算制約の下で、Aさんの効用を最大化する

$$\text{予算制約 } 1000 \geq p_1x_1 + p_2x_2$$

$$\text{効用関数 } U(x_1, x_2) = x_1^{0.6}x_2^{0.4}$$

x_1, x_2 はそれぞれ紅茶とワインの購入量

この予算制約の下で効用 U を最大化するのは

$$x_1^* = \frac{600}{p_1}, \quad x_2^* = \frac{400}{p_2}$$

であることがわかる

例題 2：複数人の意思決定



例題 2

AさんとBさんの夫婦が1000円を持っている。AさんとBさんは、その1000円で紅茶とワインを買いたい。紅茶は1gあたり p_1 円でワインは1mlあたり p_2 円である。AさんとBさんは紅茶とワインにいくら使うか決めなければならない。

例題 1 との違い：AさんとBさんという2人の個人が存在

- AさんとBさんの望みが完全に一致
- 利害対立が無い：例題 1 と同様の答え

例題 2 において利害の対立がある場合



例題 2

AさんとBさんの夫婦が1000円を持っている。AさんとBさんは、その1000円で紅茶とワインを買いたい。紅茶は1gあたり p_1 円でワインは1mlあたり p_2 円である。AさんとBさんは紅茶とワインにいくら使うか決めなければならない。

例題 1 との異なる違い：AさんとBさんの好みが違う → **利害の対立**

- どうする？
- 政治経済学に頼らなくとも、厚生経済学で解答が可能

例題 2 に対する厚生経済学の答え



AさんとBさんの効用を重み付けした上で最大化を目指す

Aさんの比重 $\alpha \in [0, 1]$

Bさんの比重 $1 - \alpha$

最大化する効用 $U = \alpha U_A + (1 - \alpha) U_B$

U_A, U_B はそれぞれAさんとBさんの効用

- α が大きいほど Aさんが得、小さいほど Bさんが得
- パレート効率性を満たす

例題 2 の解答に対する疑問と政治経済学的発想



α は誰が決めるの？

→ 政治的に決められる：政治経済学の解答

- 政治的：交渉、権力・影響力の行使
- 経済学的な「最適」解に落ち着くとは限らない：パレート効率性が満たされない
- 非常に非効率な結果が生じ得る

実際の研究例 1



業績評価投票 (Fiorina 1981)

有権者の投票行動は、政府の業績によって変わるのだろうか。つまり、政府の業績が良い（景気がいい）と与党が票を増やし、業績が悪いと与党の得票が減るのだろうか。

- 政治経済学以前の政治学：有権者は個人の属性によって投票先を決める
- 政治経済学：有権者は合理的に投票先を決める
- 業績が得票に影響する！
- 政府は選挙前に業績を上げようとするのでは？

実際の研究例 2



政治的景気循環 (Nordhaus 1975)

有権者が政府の業績を評価するなら、政権維持を目指す政府は選挙の前に景気を良くしようとするのではないか？

- 政府が選挙前に景気を良くしようとするための政策を実施する
- その結果、選挙前には景気が相対的に良くなり、選挙後には悪くなる
- 景気循環は政治的に生み出される！
- 業績の良い・悪いの判断は、人によって違うのでは？

実際の研究例 3



党派的マクロ経済政策 (Hibbs 1977)

有権者の望む政策は一様ではない。特に党派性（左派か右派か）によって、経済的選好が異なるはず。左派政権と右派政権では選挙前に実施する政策が異なるか？

- 左派政権は高インフレでも低失業を目指す
- 右派政権は高失業でも低インフレを目指す
- マクロ経済政策は党派性の影響を受ける！
- それなら、…

結局、政治経済学とは？



- 合理性の仮定
- 個人に注目
- **利害の対立**：戦略的相互作用
- 行動を左右する**制度**に注目
- 政治的要因によって生み出される非効率な決定そのものだけでなく、非効率な決定から生じる新たな効果にも注目

政治経済学を新たな学問領域 (discipline) として確立しようとする動きもある
(cf. 河野勝 編. 2013. 『新しい政治経済学の胎動』)

何のために政治経済学を学ぶのか



- ① 政治経済学の対象に興味がある
- ② 分析能力の獲得
- ③ 研究の幅が広がる (1) : 政治学だけ or 経済だけに限定しなくてよい
- ④ 研究の幅が広がる (2) : 個人の行動に注目しながら、制度の役割も説明する

来週の内容



政治経済学の分析ツールを理解する

- 合理性とは？
- 制度とは？
- 戦略的相互作用とは？
- etc.